

学園創立100周年記念行事報告Ⅱ

記念祝典・コンサート

10月29日(土) 愛知県芸術劇場コンサートホール

学園創立100周年と大学30周年の中心的な記念行事「記念祝典・コンサート」が昼と夜の2回、盛大に開催された。昼の部は教育関係機関、県内の学校関係者、海外提携・姉妹校、公募による一般招待者などの来賓が、夜の部は公募による一般招待者、同窓生と学園関係者が出席した。

舞台は、著名な作曲家の北爪道夫氏に依嘱し、この日が初演となる愛知淑徳学園祝典序曲で幕開け。小林素文理事長の式辞の後、北爪氏作曲のファンファーレ、オーケストラバージョンに編曲された伝統ある学園歌と大学歌が披露された。北爪氏自らが名古屋フィルハーモニー交響楽団を指揮し、この日のために大学・高校・中学の在校生、卒業生、教員を中心に編成され、練習を重ねてきたキルシュ・ブリュート楽友会の合唱による初演である。

次いで、本名徹次氏指揮による名フィルと、世界最高峰のオーケストラ、ウィーン・フィル・ハーモニー管弦楽団のコンサートマスターを務めるライナー・ホーネック氏のバイオリン、ヴォルフガング・トムベック氏のウィンナ・ホルン、三輪郁氏のピアノ、テノール歌手の錦織健氏による演奏と独唱の熱演が続いた。最後は会場一杯に鳴り響くアンコールに、出演者と出席者の手拍子によるラディッキー行進曲の演奏により閉幕した。



出演者へ花束贈呈



式辞を述べる小林素文理事長



錦織健(テノール)



ライナー・ホーネック(ヴァイオリン)
ウィーン・フィルコンサートマスター



ヴォルフガング・トムベック(ホルン)
ウィーン・フィル首席奏者



三輪郁(ピアノ)・本名徹次(指揮)

大学、短大、高校三同窓会記念行事「光源氏・さかさまに行かぬ年月よ」

10月15日(土) 愛知県芸術劇場大ホール

学園の恩師・同窓生・父兄など約3000名が集った同窓会行事が華やかに開催された。

第1部の記念セレモニーは、器楽合奏&混声合唱で開幕。「愛知淑徳学園歌」「大学歌」では、歌詞カードを見ながら口ずさむ人も見られた。小林素文理事長のあいさつのあと、大学、短大、中高の同窓会長らが壇上に立ち、母校の100周年を祝うと共に、さらなる発展を祈った。

第2部は、「源氏物語」の世界を、第一線で活躍する6人の男性アーティストの競演で描く「光源氏、さかさまに行かぬ年月よ ～美しき男たちの「源氏 音かたり」～」。雅楽師の東儀秀樹、ヴァイオリニストの古澤巖、俳優の橋爪淳、ピアニストの塩谷哲、声楽家の樋口達哉、花司の小川珊瑚鶴という豪華メンバーが、ステージ上を縦横無尽に舞い、奏で、語り、弾き、歌い、生ける「総合舞台芸術」で、観客に大きな感動を与えた。



第1部の三同窓会合同コンサート



同窓会長と顧問



会場を埋めた3000名の来場者



第2部「光源氏・さかさまに行かぬ年月よ」

大学開学30周年記念講座



左より高橋啓介教授、谷口明広教授



シンポジウム「ともに生きる社会をめざして」

シンポジスト：上野千鶴子氏(東京大学大学院教授)、渡辺一史氏(作家)
高橋啓介、谷口明広(本学教授)

10月15日(土) 星が丘キャンパス [主催/医療福祉学部]

公的介護保険の改正や障害者自立支援法の制定という流れのなかで、要介護者に対する環境が劇的に変化している。誰にとっても住みやすい地域社会を創り出すことが、ノーマライゼーションの具現化であり、社会福祉が目指す究極的目標である。

今回の記念シンポジウムは、『当事者主権』を書かれた東京大学教授の上野千鶴子さんと、『こんな夜更けにバナナかよ』の著者である渡辺一史さんをシンポジストにお迎えし、障害を持つ人たちの「介護問題」を通して、ノーマライゼーションを実現させていく方法について活発な討論が行われた。